

触感を表すオノマトペの主観的出現頻度

○生駒 忍

(筑波大学人間総合科学研究科)

キーワード: オノマトペ 触覚 基準表

Subjective frequency of tactile onomatopoeia

Shinobu IKOMA

(Graduate School of Comprehensive Human Sciences, Univ. of Tsukuba)

Key words: onomatopoeia, tactile sensation, norm

目 的

心理学や感性科学において、オノマトペへの関心が高まり、取り上げられる機会が増えている。特に我が国では、日本語がオノマトペを豊富に持つ言語であることもあって、研究数が増加している。

言語材料を実証研究に用いる場合、その基本的な特性をあらかじめ測定し把握しておくことは、より整った実験計画を組み、剰余変数の影響を抑えて解釈を明瞭にするために、重要である。特に、どれだけ使われていて見かける機会があるか(出現頻度)は、ことばの認知におけるさまざまな効果と関連することが知られている。また、研究対象者がその語になじみがないことによって研究の妥当性が損なわれないようにするためにも、出現頻度に注意を払うことが求められる。

本研究では、日本語の多様なオノマトペのうち、触感を表現するオノマトペについて、主観的出現頻度の定量化を行う。近年、触感のオノマトペが心理学実験に用いられるようになってきている(例えば、岩佐・小川, 2009)ことから、その基本的な特性を測定し定量化しておくことは、この分野の研究の発展に有意義であると考えられる。

出現頻度には、新聞データベース等を用いて、どれだけその語が現れているかを計数した客観的出現頻度と、人間の側がどれだけ見かけると感じているかをとらえた主観的出現頻度とがある。そのうち、本研究では後者を対象とする。これは、オノマトペはその性質上、新聞のような公共性の強い媒体では用いられにくく、むしろ電子メールや SNS、電子掲示板などの CMC のような、従来の客観的出現頻度の分析では扱われないような場での使用が多いと考えられるためである。

方 法

調査対象者 大学生 49 名(平均年齢 20.43 歳; 全て女性)を対象とした。

材料 触感を表す 19 語のオノマトペを取り上げた。これは、岩佐・小川(2009, 調査 1)が触覚擬態語として採用したものから、ABAB 形式ではない構造である「かちこち」「でこぼこ」「ふんわり」の 3 語を除いたものである。いずれもひらがなの横書きで表記し、MS P ゴシックで記載し提示した。

手続き 調査は 10 名強の小集団毎に実施された。21 語のオノマトペについて、どのくらい目にするかがあるかを、1(全く目にしない)～5(非常によく目にする)の 5 件法で評定させた。評定判断時間は定めず、回答は自由なペースで行われた。

結 果

欠損値のなかった 48 名の評定値を集計対象とした。

それぞれの語について平均値および標準偏差を求めたところ、Table 1 のようになった。

Table 1 主観的出現頻度の評定結果 (n = 48)

	区分	平均値	標準偏差
がさがさ	硬	4.13	0.95
かちかち	硬	2.92	1.22
がちがち	硬	2.83	1.23
こちこち	硬	1.77	0.94
ごつごつ	硬	3.52	1.31
ごりごり	硬	2.67	1.33
ごわごわ	硬	3.75	1.18
ざらざら	硬	4.44	0.73
つるつる	硬	4.58	0.76
ぼこぼこ	硬	3.56	1.21
すべすべ	柔	4.58	0.64
ふかふか	柔	4.83	0.42
ふさふさ	柔	3.98	1.13
ぶよぶよ	柔	3.08	1.46
ぷよぷよ	柔	3.10	1.40
ふわふわ	柔	4.54	0.71
ほわほわ	柔	3.02	1.46
もこもこ	柔	3.92	1.11
もちもち	柔	3.73	1.27

岩佐・小川(2009)の硬さ/柔らかさの区分に基づき集計したところ、硬さオノマトペの平均出現頻度は 3.42、柔らかさは 3.87 となった。各調査対象者毎に両区分の平均値を算出し比較したところ、柔らかさオノマトペの評定値のほうが有意に高いことが示された($t(47) = 4.93, p < .0001$)。

考 察

本研究では、触感を表現する日本語のオノマトペについて、19 語を取り上げ主観的出現頻度の定量化を行った。質問紙調査の結果、Table 1 に示したような結果が得られた。

なお、今回の調査では、対象者は全て女性であった。指先の触覚には指の大きさの違いに由来する性差があり(Peters, Hackeman, & Goldreich, 2009)、また触り心地への興味・関心にもジェンダー差があると考えられることから、男性を対象とした場合についても定量化を行い比較できれば興味深い。また、大学生以外でのデータを収集したり、今回の 19 語以外のオノマトペも加えたりすることで、より汎用性の高い基準表となるような整備を進めることができればなおよい。

引用文献

- 岩佐和典・小川俊樹 (2009). 筑大心研, 38, 97-107.
 Peters, R. M., Hackeman, E., & Goldreich, D. (2009). *J. Neurosci.*, 29, 15756-15761.